水面の月の光

B-零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
水面の月の光

【Ｎコード】
Ｎ０７３４Ｌ

【作者名】
Ｂ一零

【あらすじ】
マフィアのボスの娘になった主人公は、もう一人の自分の死の真実を探る。転入した学校には、謎めいた二人の日本人転入生そして魅惑的な生徒達。「愛は素敵だよ」愛を探している転入生の少女・椿「関わろうとするな」アメジストの瞳をした美少年・レイド。死の真実と謎を追い掛ける主人公・ビアンカ。

あたし

僕は普通に生きている。
そう言う人間にあたしは吐き捨ててやる。
ばかめ　さっさと“普通”に死ね。

“普通”って一体誰が勝手にそれを基準にしたんだ。“普通”って良いこと？

大嫌い
手に届かない“普通”なんて

あたしは嫌い
　この人生が“普通”だとほざく奴がいたら殺してやる。“普通”だと思い込んだバカな人間達は偽ろうとする。訳のわからない虚しさに気付かないフリをして偽る。
哀れだ。バカだ。
貶していないとあたしは今すぐ、泣き叫びそうだった。

　愛されてると勘違いしていた親に売られた。過保護でいつも心配してくれる親は自分を愛している、そう勘違いしていたんだ。
　でも心の何処かでわかってた。

　あたしを産み落とした親は、何の期待を抱かないバカなあたしが問題を起こすことを心配していただけなんだ。

　その証拠に大金をだされて奴は、あたしを売り飛ばした。

全ては無意味。
あたしは目を閉じた。
全てを捨てた。
逃げるいい機会だから。

亡くした娘に似ているからと、コーネル・ナイトレイという男に養子にされた。

彼はマフィアのボス。
あたしは昔からマフィアと警察が嫌いだった。
母親はあたしが産まれるずっと前にマフィアに関わっていたという。その癖に警察と恋に落ちた。その警察が父親だが、彼は他の女の元にいってしまったそうだ。
哀れな母親。大嫌いな母親。　コーネルは心を開かないあたしを毛嫌いしなかった。黙り込んでも欲しいものはないかとプレゼントを並べる。
あたしは首を振るだけ。

それを続けて数日。
やっと彼は手を上げた。よくあたしの態度をここまで我慢できたな、と平然と思った。
叩かれた頬がヒリヒリと痛みつつもそう何事もなかったかのように思う。

「お前は何の為に来たのだ。養子が嫌だったのなら親に言えばよかっただろ！」

説教口調、そしてその言葉にイラッときて睨み付けた。言ってきくわけないだろ。安易に了承した親なんかが。

「言わなくてはわからないだろ！その口で言え！何がしたい！どうしたい！何もないのか！？」

マフィアのボスだけあって怒声は迫力あった。ビリビリと空気が軋む。

「何の希望もない！お前は屍か！？」

その言葉が全身に駆け巡ってあたしは立ち上がった。

「煩いっ！！！」

返す言葉を思い付けず、そのまま部屋を飛び出した。階段を駆け降り、豪邸のような家を出る。呼び止める声に何の反応もせず、門を蹴り飛ばして夜の街に消えた。

その時、後悔した。

逃げるいい機会だからとコーネルについてきて外国に来てしまったのだ。ずっと部屋の中でこの国の言葉を勉強していたからこの街のことは何も知らない。

育った国ではないのなら、尚更行く場所なんかない。

マフィアのボス。この辺をシマにしているのだからあたしを簡単に見付け出すだろう。

日本より物騒な街。

夜の街で目立たないように人混みを抜けて路地を歩く。

コーネルの部下がきたら銃を向けてやろう。部屋にあった銃をずっと持っていた。誰かが絡んだら突き付けてやる。

あたしは最高に苛立っていた。図星だ。まるであたしは屍。

生きる希望さえも捨てた人間。
希望の光なんてない。

何もかも気に食わない。
何もかもわからない。
これからどうすればいい。

暗い路地裏から見上げた月。酷いぐらい美しい淡い光を放っていた。
苦しくなる。

呼吸する度、肺と喉が痛い。涙が零れ落ちた。毎晩泣いていたのに涙はいつまでも渇れない。

「……っ」

涙を拭き取って銃口を自分の頭に突き付けた。
生きる理由を一蹴すれば、死んでもいいと思える。
だって生きる理由は、もうあたしにはないのだから。
自殺なんて選択は取りたくなかった。でも、もう楽になりたかったんだ。
引き金を引くだけ。
それだけで、全ては闇になり、何も考えなくてすむ。
終われ、あたしの存在なんて消えてしまえ。
そう頭の中で叫ぶのにガクガク震える指が命令をきかない。

引き金を引けないのは何故？
恐怖で動けないからか？
微かな期待があるから？
それとも生きたいと、思っているのか？

その時だ。
背後から気配がした。
次の瞬間、銃を持つ手を掴まれ、口を押さえ込まれる。もがいたがビクともしない。そのまま後ろに引き込まれた。

「じっとするんだ」

英語でそう言われた。低くいが若い男の声。
押さえ込んだまま彼は何もしない。あたしは言われた通りじっとしたが男は手を放さなかった。
ビクリとあたしの身体は震え上がった。訳のわからない恐怖に襲われる。

ゲラゲラと笑い声が聴こえた。右から左へと“何か”が通り過ぎる。暗闇の路地。
まるで見付かってはいけない。そんな警告が聞こえた気がして、息を潜める。

あたし達は見つかることなく“何か”は通りすぎていった。
ふと身体が軽くなり、まだ背後の男に掴まれていることに気付く。耳元で彼の息遣いを感じて力いっぱいに振り払った。
今度は抜け出せたが、銃を取られてしまう。

「……自殺なら他所でやれ」

不機嫌な口調で男は言った。

「俺達が迷惑する、家か森でやれ」

月の光の下に出てきた男は銃をあたしに差し出す。
サラサラした黒い髪、睨み付けるアメジストの瞳。
あたしと同じくらい、いや多分歳上の男の子だった。
あたしはしかめっ面をして銃を奪い返す。

「ごめんなさい。今の、なに？」

ちゃんと伝わるか不安だが、英語で聞いた。男の子は冷たい表情であたしを睨んでから背を向ける。そのまま暗い路地裏を歩いた。

「ちょっと！」

追い掛けたけど、彼を見失った。人通りに出て、周りを見たが彼の姿は何処にも見当たらない。
キィッと目の前にスモーク張りの黒い車が止まった。
中から出てきた男達に強引に引っ張られ、車に押し込まれる。

「おい、何やってんだ？夜は危ないって知らないのか！」

あたしの隣に座る男が言う。あたしは何も言わずに頬杖をつく。
男は溜め息を溢した。
英語の教師をしてくれるエドウィン・テイクだ。コーネルの有能な部下の一人。

「ボスは銃を持たせたなんて言ってないぞ」

銃を見せて問いただす。

「部屋にあったの」
「日本語で話すな！英語で話せ！」
指で額を小突かれた。
「…コーネルは怒ってる？」
「お父様と呼べ！…かなり心配してるぞ」
なら自分で探しにこい。その言葉は言わないで腕を組んだ。
それから溜め息を溢す。
あの眩しいくらい白い豪邸に連れ戻された。エドウィンに腕を引かれながら玄関に入ったがあたしはそれ以上足を動かそうとはせず踏みとどまる。
エドウィンが怒ってコーネルと会えとガミガミ言っている間に彼が来た。
あたしは立ち尽くしたままコーネルを見上げる。
「怒ってる？」
だから英語を話せ！とエドウィンが睨み付けたけど直ぐにコーネルに頭を下げていなくなった。
「叩いてすまなかった」
何故謝るのよ、悪いのはあたしなのに。コーネルは謝ったけど上の姿勢のままだ。
「何か言いたいことはあるか？」

あたしと同じ腕を組んで目を真っ直ぐ見た。
迷惑だと言われたから自殺はやめました、なんて言えない。
それはやめておこう。

「……お腹、空いた。…一緒に食べない？」

ぶっきらぼうに言った言葉にコーネルは嬉しそうな笑顔を溢した。

元々あたしは器用な人間なんかじゃない。丁度よく愛想よくなんか出来ない。とことん不便な人間だ。
でもコーネルにそれを八つ当たりしてはいけない。
彼は最愛の娘を亡くした。
あたしに似た娘。
金髪で色白の青い瞳。
あたしとは全く違う容姿だけど雰囲気、顔立ち、声が似ていると言う。
写真を見せてもらったことがある。髪を染めて青くすれば“彼女”らしく見えると思う。

名前はビアン、ビアンカネーヴェ。
彼女の母は彼女が幼い頃に敵マフィアに射殺された。それ以来彼女は心を閉ざして今のあたしみたいな不器用な人間になった言う。

身内、マフィアのファミリーには強気な振る舞いを見せていたが学校では誰とも親しくならなかったそうだ。
故にビアンの友人はいない。
それどころか、この街の住人はビアンカの存在さえも知らないかもしれない。

あたしには都合がいい。　ビアンの名前を引き継いだあたしに声をかけた人に一々説明せずにすむのだから。
だけど、“彼女の存在さえも知らない”なんて…胸が痛む。
きっとコーネルも苦しいだろう。

彼女の死因は謎に包まれている。喉を刃物で掻き切られ森で発見された。警察は動物の仕業と片付けたがマフィア達はそれで納得しない。

敵マフィアではないかと、今でも調べているそうだ。
４年の月日を経て、コーネルはあたしを見付けた。

自分の部屋で窓を見つめ、考えていたあたしは思いつく。
ビアンカを殺した犯人を見付けよう。殺した女と似た女を見つけたら、犯人は近付いてくるかもしれない。否、本人と名乗れば来るだろう。

見付けよう。
　あたしが出来ること。
やってみよう。
あたしは意を決した。
他にすることがないのだから、簡単に決まった。

彼女が通っていた学校に行き、彼女の行動を知り、彼女の周りにいた人間に探りをいれる。
　探偵染みた行動だが敵マフィアの仕業でないのなら見付けられるはず。
　丁度数日後、ビアンが通っていた学校に入学する。
やってみよう。

あたしは動き出した。

転入生

あたしは動き出した。

哀れなビアンカの父親の為にも、ビアンカの為にも。

単なる暇潰しだと自分に言い聞かせて。

英語の勉強を熱心にやったらエドウィンに気持ち悪いと言われたので消しゴムを投げ付けてやった。

「ビアンカはファミリーとは仲が良かったのよね？」

「は？…嗚呼…まぁな」

「貴方とも？」

「当たり前だろ」

「じゃあエドウィンさんはビアンカと何処か遊びに行ったりしました？」

聞いたら彼は面白くなさそうに顔をしかめた。一体どうしたのかと首を傾ける。

「……エドでいいって言ってるだろうが、いつもいつも」

ポツリとエドウィンはそう呟いた。嗚呼それね。

「エドでいいの？ビアンカにもそう呼ばれてた？あっビアンカが好きだった？」

「バカ！んなわけねーだろ！！あほかっ！っお前アホだ！」

ムキになって慌てるエドウィンは怪しい。そのまま駆けるようにあたしの部屋を飛び出す。好きなんだったのかな？彼も容疑者にいれておこう。

転入当日。
朝は早めに使用人に起こされてノロノロと支度をした。

「おはよう」

一緒に朝食をとるコーネルに挨拶。席について他愛のない会話をする。

「先生方はとても親切だ。だが悪い生徒には気を付けてくれ、君がマフィアの子だと知り近付く奴らには尚更だ」
「……うん」

マフィアの仕事はあまり聞かないことにしている。あたしがそうゆうのが苦手だと知っているからコーネルも話さない。苦手と言うか麻薬などは嫌いだ。
つまり学校の生徒が麻薬欲しさにあたしに近付く可能性があるから気を付けろ、ということ。

大丈夫。
あたしはビアンカ同様友達を作ろうとは考えてはいない。
近付くのはビアンカを知る者だけ。先ずは教師から聞き出してみよう。

エドウィンに車で送ってもらい、学校にきた。アメリカの学校は日本と違う。

グリーンの芝生、に笑う高校生達がいる。徒歩に車、自転車でくる生徒。皆が私服、もしくはユニフォーム。まず車でくる生徒なんて日本の高校生にはいない。

「いいか？緊張して笑い者になるなよ。転入生は何かと目をつけられて話しかけられるが体目的だから絶対に気を許」

「はいはーい、おせっかいめ」

無用な忠告を遮ってあたしは吐き捨てた。短気な彼は怒って車を降りたあたしを掴まえる。

「おせっかいだとてめっ」

「エド、送ってくれてありがとう。お迎えもよろしく」

ギッと睨み付けるエドウィンに甘い声で礼を言う。
名を呼ぶときは思いっきり甘く呼んでそれから額に唇を重ねた。
そうすればエドウィンは爆発的に真っ赤になる。

歳上のくせにこれぐらいで真っ赤になるなんて可笑しい。
心の中で笑ってからそのまま校舎に向かって歩く。
真っ赤なエドウィン。ああ面白い。

すっかり気が楽になって受け付けに向かう。

「ああ、あなたがビアンカネーヴェ・ナイトレイね」
　やっときたと言わんばかりの事務室の女の人はあたしを見た。時計を確認したが授業にはまだ十分時間がある。

「実はね、今日はあなただけじゃないのよ」

あたしの疑問にすぐ答えてくれた。女の人の視線の先には壁に並べられた椅子に女の子二人が座っている。
一日で転入生が三人もいるなんて。不快に思いつつも二人の隣に腰掛けた。

「嗚呼、杏子ちゃん。緊張で心臓が爆発しそう」

「大丈夫ッスよ！練習は完璧だから！」

二人の話が聞こえた。日本語だ。同じ日本人のようだ。
もう一度目を向ければ、隣の髪を下ろした女の子と目が合う。黒く長い髪にブラウンの瞳。
あたしと目があってぎこちなさそうに会釈した。あたしも軽く会釈する。

「おはよう、ビアンカ。私はサムだ」

目の前に男の人が立って挨拶した。あたしは笑みを貼り付けて挨拶を返す。
この先生があたしを案内してくれるという。コーネルの根回しだ。
椅子から立ってサムの後を歩いていれば女の子の会話が聞こえた。

「綺麗な娘だね」

綺麗？貴女の方が可愛いけど。おしとやかな雰囲気の娘とポニーテールの明るそうな娘の方があたしより可愛い。
そんなことを思いつつも案内する先生の言葉を聞いた。
教室の外に並ぶロッカー。生徒達の視線はあたしに集まる。あたしは気付かぬフリしてサムに話しかけた。

「あなたはいつからいるんですか？」
「私は二年前からだよ」
なら意味ない。
こいつは役に立たないな。ビアンカのことを聞き出せることは出来ない。

「じゃあ四年前が勤めてる先生っていますか？」
「ああ、それなら数学と生物、それから体育の先生だな。ほとんどの教師は四年前からいるぞ、校長や事務員も」
ラッキー。思わず指を鳴らすところだった。どれも好きな科目だ。近付いて話し掛けよう。
　最初の授業に行き、授業を受けた。自己紹介した時、空気が重くなったがあたしは無視した。
ナイトレイの名前は知り回っているようだ。放っておいても邪魔な人間は近寄らないらしい。

　二時間目は理科。
ニコッと理科の先生、ラルク・シャークに挨拶する。
なんだか若く綺麗な先生。
細めて見る目が何だか不快に思えたが、気前のいい先生だった。
「美女は大歓迎だ、ビアンカ。ただしオレの授業で寝たら特別コースの居残りをやるからな？」
冗談かどうかはわからないがユニークな先生。そんな先生に合わせて笑いを溢す。それから席に案内してくれた。
　座ればこちらを見てくる男子生徒に気付く。品定めするかのように足元から髪の先までいやらしいなめ回すように見つめてくる。

目を合わせれば、彼はにっこりと目を細めて笑みを向けてきた。
スパン。
彼の頭をラルク先生が教科書で叩いた。周りから笑いが零れる。
しかし、叩かれた彼はニヤニヤと笑みを浮かべたまま反省の色を見せなかった。
変なの。あたしは不可解に思いつつも、教室を見渡した。
変な学校と思うのは気のせいかしら。何かが、変。
違和感を感じる。
その違和感はなんだ？
首を傾げてラルクの背中を見つめた。何なんだろう…。
次の授業は数学。
数学の教師は女の人。多分この学校で一番の美女教師だろう。
「じゃあ二人とも挨拶して」
ブロンドの髪を一つに束ねた彼女は穏やかに笑ってあたしともう一人の女の子に言う。
そこであたしは教卓の前で教室を見て、“彼”を見付けた。
窓際の席。
小さな本を読んでいる。
サラサラした黒い髪は明るい光にキラキラしているように見えた。
そしてあたしが好きな落ち着いた雰囲気。
忘れもしない。
あの夜に会った男の子だ。
記憶よりずっと綺麗な顔立ち。青く澄んだ瞳に白い肌。素敵、は彼に言うべきだ。

彼は飽きたのか、読んでいた本を少し乱暴に閉じてから不機嫌そうに頬杖をついて窓を見る。

それでもあたしは彼から目が放せないでいた。
有名な画家が描いたような素敵なシーンを見つめてしまう。
暗い路地であった時と印象はまるで違う。光を浴びた彼はダイアモンドのようだ。

不意に彼が視線に気付いてあたしの方を初めて向いた。
目があった彼は目を丸める。信じられないと言う顔であたしを見た。

「ビアンカネーヴェ・ナイトレイです」

彼を見たまま自己紹介した。

「よろしく」

それから彼から目を逸らす。隣であの女の子が自己紹介した。先生は次に一番後ろの席に座るように指示したからあたし達は並んで座る。
彼を見てみれば、不可解そうにこちらをまだ見ていた。
自殺しようとしていた女が転入してきて驚いてるようだ。

笑わないように平然を装って隣を見た。
あのおしとやかな雰囲気の女の子。名前は確か…椿？

「……よろしくね」
「えっ？」

日本語で話し掛ければ驚いたように目を丸めた。あたしより目が丸くて大きい。可愛いな。

「さっき話してるの聞いちゃって…あたしも日本人なんだ、一応ね」

彼女も進んで話しかける娘ではないみたいだったからあたしから話し掛けてみた。

「ほんと？よかった、嬉しいな。私英語上手く喋れなくて」

苦笑してみせる彼女は嬉しそうに笑いかける。あっ可愛い。なんだか小動物みたい。

「あたしも同じ日本の娘がいてほっとしてるの。あたしの事はビアンカって呼んで」

「あ、私のことは椿って呼んで」

手を差し出して握手する。

「椿、花の名前ね。花言葉は魅力的な美しさ」

名前の通り魅力的な美しさがある娘だ。彼女は照れたように笑う。

「ビアンカネーヴェはイタリア語で白雪姫ね？綺麗」

あたしにつけられた名前じゃないけどね。

不意に椿はこちらを見た彼に気付いた。怪訝そうに眉間にシワを寄せて顔を伏せる。

「どうかした？」

「えっ？ううん、なんでも」

椿は誤魔化していたが何かあるってあたしにはわかった。
彼と知り合い？なんだろう。妙な先入観があるせいか、何もかも怪しんでしまう。

とりあえず、ビアンカのことを調べなくちゃいけない。
ランチの時間、あたしは四年前から学校に勤めている先生を探すため校内を歩いた。
ほとんどの生徒は廊下にいない。質問の言葉を頭に浮かべながら一人で歩けば、彼と出会った。

廊下の突き当たりに待ち構えていた彼に驚いて震え上がってしまう。

「死ぬのはやめたのか？」
「…生きてて驚いた？」

驚いた心臓を落ち着かせて彼を見つめる。じっと見つめる青い瞳に吸い込まれそう。

「迷惑だって言われたからやめたのよ。もうしない、気の迷いだったから」

肩を上げて話す。また黙って去らない内に。

「…だからありがとう」

素直に礼を言う自分。気持ち悪いなと思いつつ、キョトンとした彼を見つめた。どこを見ても欠点がない。スタイルもモデルのように

スラッとしている。

「別に、オレは、ただ…。礼を言われることはしてない」

そう、とあたしは小さく笑う。お礼に戸惑って目を逸らす彼は素直ではないな。

「名前、聞いていい？」

「…レイドシェル・エレイ」

ふーんかっこいい名前ね、と呟く。レイドシェルは髪をくしゃくしゃと掻いた。

「…何故あんな真似を？」

「…ラルク先生のところに案内してくれたら、話そうかな」

「…何故ラルク先生に？」

警戒した目付きで彼はあたしに鋭く聞いた。

「授業のことで、聞きたいことがあるのよ。何かいけない？」

「……いや」

困ったように彼は髪を掻く。サラサラした髪はしなやかで触り心地が良さそう。

「そっ。ネガティブになって全部考えたくなくなったから銃を頭につけつけただけよ。先生は自力で探すから」

じゃあっと言ってあたしは歩き出す。後ろ髪を引かれたが目的を遂げたい。

だけど、グイッと手首を掴まれて止められた。

「……案内、する。あの先生はたらしだ、女一人は危険だから」

「……ありがとう」

ニコリとあたしは笑みを向けた。ぶっきらぼうだが、優しい人だ。気を使ってレイドシェルは前を歩き出した。

「ねー、レイドシェル君。アレは何だったの？」

「……」

背中しか見えなかったが不機嫌が伝わった。華奢な身体。お洒落な服装。

「…アレは、何？なんだか…凄く危険に感じたんだけど」

思い出してもゾッとしそう。レイドシェルは振り返ってあの時と同じようにあたしを睨み付けた。

「……君には関係ないものだ。忘れろ。関わろうとするな」

それは忠告。何だ？あたしはますます困惑する。隠されると知りたくなる、好奇心旺盛なあたしは気になって仕方ない。

恐怖を謎のままにするのは怖い。あたしは知った苦しみの方が耐えられる。だから知りたい。

「あたし、忘れることできないと思うわ」

「……」

「貴方は関わってるのね？」

「…違う、奴らと違う」

彼は知っている間違いなく。奴らを知って、あたしを守ってくれたんだ。
相槌で頷いていれば、レイドシェルはまたあたしを睨み付ける。
ガッとあたしの二の腕を掴み、真っ直ぐに目を覗き込む。
「他言はするな。さもないと殺される、わかったな？」
グイッと握り締められる腕が痛い。
間近にある青い瞳。
なんだ、なんだ？
何を隠しているんだ。不意にビアンカのことを思い出してあたしは目を丸めた。
「四年前に死んだ娘と関わってる？」
「…四年前？」
「ビアンカネーヴェ・ナイトレイ。金髪の少女」
目を細めてあたしを観察するように見るレイドシェル。この様子じゃあ知らないようだ。
「ビアンカネーヴェ・ナイトレイは君だろ？」
その言葉に思わず吹き出してしまう。ギッと睨まれる。
「ええ、あたしよ。貴方の忠告はちゃんと聞いたわ、ありがとう」
クスクス笑ってあたしは歩き出す。怪訝そうに彼は見たが案内を続けた。

辿り着いた先は理科室の準備室。その扉を開いた彼は不機嫌になった。

「あっ！ビアンカ！オレ覚えてる？理科で一緒の」

「退けよあほ。レイド抜け駆けかよ、こんな奴よりオレにしなよ。ビアンカ」

覗いてみればその中にはラルク先生と二人の生徒がいた。レイドシェルを見てから彼らはあたしを見るなり駆け寄る。

あたしが一歩引けばレイドシェルが腕を伸ばして守ってくれた。

二人は舌打ち。

一人はあたしを舐めるように見ていた男の子と違う、理科で一緒だった男子生徒だ。

二人とも綺麗な顔立ち。それから日焼けしてない白い肌。

「珍しいな、レイドが生徒といるなんて」

ラルクは目を細めてあたしを見る。“生徒”と言った言葉が何か他の言葉が含まれたように感じた。

「彼女が先生を探していたので案内しただけです」

不機嫌に刺々しくレイドシェルはラルクに答えた。

「ラルクの居残り志望？オッサンが好みなの？」

残念がる声を出して一人がラルクに軽蔑の眼差しを向けた。素早くラルクに叩かれる。なんだかやけに仲がいいのね。

「わからないとこを教えてもらおうと思って、お邪魔でしたか？」
上目遣いにラルクを見上げる。レイドシェルの言う通りたらしなら助かるんだけど。
「喜んで」
ニヤッとラルクは妖艶な笑みを向けて中に入るように手招きした。
楽勝。
かと思えば、腕を掴まれた。
「オレが教えるよ！オレの名前はピエール・スティラー」
理科で一緒の子が引っ張っる。邪魔がいるな。
「やめろ、引っ込んでろ出てけ出てけ」
彼の腕を振り払い、シッシッとラルクは追い払おうとした。
「先生が猥褻行為をしないようにビアンカを守らなきゃ。オレはクラウス・カーター、よろしく」
もう一人が名乗った。
あたしはただ無関心な顔でよろしくと返す。邪魔だな、聞き出せないではないか。
「で、どこを教えて欲しいんだ？」
教科書を取り出してページを開けばラルク先生は無駄に近付いて教科書を覗いた。片腕はあたしの肩に回し、頭の上から覗いてくる。

本当にたらしか。こんなに近付かなくてもいいじゃない。
内心呆れながらも愛想よく問題を聞いた。
「ああ、これは」
さりげなく手に触れてきて思わず眉間にシワを寄せる。すると目の前に手が横切ってラルクの手を掴んだ。
見ればそこにはレイドシェルがいた。あまりの近さに顔を引く。
「先生、あんまり触るな。訴えられるぞ」
ギロッと睨み付ける。ラルクは軽く笑った。
「何言ってんだよ、ただ手に触れただけだろうが」
「訴えられますよ」
鋭く切り返すレイドシェル。やはり彼は優しい、と内心で笑った。
「先生、あたしの事知らないんですか？」
「ん？」
堪えきれず笑って先生を見上げた。
「父はマフィアのボスです。彼の言う通り、触らない方がいいですよ」
「あー……忘れてた」
パッとラルクは手を上げる。だけど皆大した反応を示さなかった。恐怖を感じた重い空気がなかった。ただ意外、と言わんばかりの視線と驚いたレイドシェルの顔だけ。

「先生は四年前からいたんですよね？この学校に」
「いや、五年前だ。なんでだ？」
「じゃあビアンカネーヴェ・ナイトレイは知ってますか？」
知っているならこれだけでわかるはずだろう。じっとラルクを見上げる。どんな返答がくるかな。
「…ああ、覚えてる。美人だったが…一度も近付けなかったな」
そう彼は呟く。嘘だ。目を逸らしたのを見てそう直感した。
「彼女がどうした？」
「いえ、ただ…彼女が知りたくって。どんな子だったのかなって」
愛想よく首を傾けて無邪気をアピール。警戒されないように慎重に演技する。
「なら校長とお茶しろ。学校の中で一番仲がよかったはずだから」
意味ありげに言う。
「父の方じゃないんですか？」
それを言うなら。
「彼女、悪いことしてたんですか？」
冗談のように聞いてみる。

「そんなまさか、優等生だ。かなり頭のいい自慢の生徒だった」
大袈裟にラルクは言う。
本当？信じられないと言う演技をしてまた問題を指差す。
慎重にやろう、何より部外者がいる前ではやめよう。
「ありがとうございました、先生」
「勉強に積極的な生徒は大好きだ、またいつでもこい」
軽くラルクはあたしの頭を撫でた。
「女子生徒限定」
付け加えたのはピエール。直ぐ様ラルクはピエールの頭を叩いた。
「そう言えば先生、今日授業で叩いたあの生徒の名前はなんですか？」
「……あんなのがタイプなのか？」
「いえ、気になっただけです」
「名前はジェイド・ジオ・コナーだ」
ラルクがその名を答えた瞬間、空気が変わった。あたしが教室で自己紹介した時みたいにシンと凍った空気。
「…彼が、何か？」
あたしは三人の生徒の顔を見た。レイドシェルと目が会えば腕を引かれてドアの外に出される。
バタン。
レイドシェルに何かを訴えるような睨みをされた後、扉は閉めら

れて閉め出されてしまった。
強引なやり方に呆れたが、先ほどのレイドシェルが言った言葉を思い出して扉を叩くのは止めて歩き出す。
関わるな、と言った。
共通点に気付いた。
レイドシェル、ラルク先生、ピエール、クラウス、そしてジェイド。
彼らは美しい容姿を持っている、そして何より彼らにあたしは不可解な違和感を覚えてる。
何かを隠してる。そしてそれはビアンカに繋がるかもしれない。
「あっ、ビアンカ！」
「あ、椿」
階段を駆け降りてあたしの元にきたのは、椿だった。
「一緒にランチ食べようって誘おうとしたんだけど…食べちゃった？」
案外人懐こいのね、この子。
「ううん、食欲ないの」
「そっか」
そっぽを向いてからまた彼女を見てみる。
「あたしの事、聞いてない？」
「え？」

「マフィアのボスの娘だって」

聞いてなかったのなら無理もないけど忠告はするべきだと思った。そしたら椿は困ったように笑って首を傾けあたしを見上げる。

「迷惑、かな？ごめんなさい」

急に謝ってきたから驚く。

「ただ…その、仲良くなりたかったんだけど…うざかったね、ごめん」

「違うわ椿」

慌てて否定した。

「うざくないわ、ただあたしがマフィアの娘だから。あたしといたら他の友達ができなくなっちゃうから…」

椿は不安そうにあたしを見上げた。それを見ていると言い訳が出なくなったから肩を落とす。

「忠告だったの。それでも仲良くなりたい？」

「うんっ」

微笑んで聞けば彼女は嬉しそうに笑みを浮かべて頷いた。思わず笑ってしまう。

「じゃあそこでランチしましょうか」

謎

どうしても椿を拒めなくて一緒にベンチでランチを楽しんだ。無邪気な目を輝かせる彼女を拒めるはずない。

「そう言えばもう一人の子は？姉妹？」

「あ、ううん…一緒に住んでるけど。他の子と仲良くなって遊んでる、杏子ちゃん明るいから」

もう一人の転入生について聞けば椿は視線を落とした。姉妹ではないが一緒に住んでいるとはどうゆうことだ？疑問に思ったが訳ありのようだから慎重に言葉を選んだ。

「日本から転入してきたのはどうして？」

「…仕事の事情で」

「親？」

「親と言うか……上司？」

「……よくわからないんだけど」

困ったように答える椿に言えば「そうだよね！」と慌てた。あわわと目を游がして言葉を探しているようだ。

「詳しく言えない仕事で…今まで転々としてたんだ。杏子ちゃんの保護者と」

言えない事情があるのか、何処か悲しそうに眉間にシワを寄せて首にかけたネックレスを握り締めている。

「わかった、もういいよ。誰でも複雑な事情はあるから」
「あ……うん…」
「あたしも複雑な事情でマフィアのボスの娘になったの。話せる時が来たら話すね」

それは信頼できたら。ちょっとだけ深読みして椿を警戒しそうだ。でも椿はいい子。悪いことはしていない感じがした。

「マフィアって言ったら皆遠巻きにしちゃうよね…大丈夫？」

眉毛を下げて心配そうに見つめてくるそんな彼女。あたしの心配。

「大丈夫よ」

友達作る気はなかったのだから、は言わなかった。どうやら椿と友達になりそうだ。

「椿ちゃーん」

不意に明るい声が降ってきた。もう一人の転入生が駆け込んでくる。名前はそう、杏子。

「次の授業始まっちゃうっス！」
「あっうん！」

慌てて椿は支度をした。それからあたしに杏子を紹介する。

「こんにちわっス！同じ転入生で日本語話せるなんてすごい偶然ッスね」

「ほんとよね」

元気に笑いかける杏子と握手。本当にすごい偶然。

「ビアンカ、次は何？」

「あたしは国語」

「そっか違うね…車で帰るの？」

「うん」

「そっか…会えたら、また話そう」

今日は会える機会がなさそうだ。残念がった素振りをしてから椿は手を振り杏子と廊下を歩き去っていった。

家に帰ったら今日についてノートに書こう。そう思いながら退屈な時間を過ごした。レイドシェルにも椿にも会う機会はこなかった。

今日わかったことは、この学校には何かがあるということ。そしてラルクが何かを知っていて、レイドシェル達は秘密を持っている。あの時恐怖を植え付けた何が、ビアンカを殺したのではないか？

考えがそこまでいってわれに返る。目の前にエドウィンの車が止まった。中に乗り込んで一息つく。

「どうだった？」

「まーまー」

転校初日について訊かれたが適当に答える。そうすればガミガミとエドウィンは怒った。あたしは頬杖をついて聞き流す。

友達は？ボスには楽しそうに話せよ！と運転しながら言い続けるエドウィンに顔を向けた。

「友達ならできた」

「ほんとか？」

「同じ転入生の子」
すごく可愛い子、と答える。チラチラとエドウィンはあたしを見た。
「…ちょっかい出してきた奴はいないのか？」
「ちょっかいって？」
「……男だ！何もされてないだろうな！？」
怒鳴り声をあげたから呆れて溜め息を吐いた。
「居たら校長室にコーネルが呼び出されてるわ」
あたしは蹴り飛ばしちゃうもの。そんなちょっかいする男子がいたら。
「お父様と呼べって言ってるだろ！」
「あーはいはい」
煩いやつ、と呟く。
流れる景色を見つめていれば、白い屋敷に戻ってきた。コーネルは留守だ。戻るまで勉強しろ、とエドウィンに部屋に閉じ込められた。勉強は嫌いだ。
適当にやってから、日記に今日のことを事細かに書き込む。誰にも見られないよう鍵のついた引き出しの奥にしまった。
丁度エドウィンが部屋に入ってきた。コーネルの帰宅だ。
豪華な夕食の時間。
「そうか友達ができたのか」
「うん、いい子なの。同じ日本人だから話しやすくってね」
「今度家に招いたらどうだい？」

「怖がらなかったらね」
冗談を言って他愛のないことを話した。あんまり椿の素性を話さないようにしたがコーネルとしては知りたいようだ。
「勝手に彼女のこと調べないでね」
「しないさ」
「ならいいけど」
そんなことしてほしくない。あたしが知るから。
「いい友人になりそうなら遊びにいってみたらどうかな？」
「いいの？」
「もちろんだ」
意外だ。とりあえず考えとこう。椿もきっと喜んでくれる。なんだか簡単に喜ぶ姿が目に浮かんだ。
食事を終えて部屋の窓辺に腰掛けた。二階から見える暗い町は淡い転々とした光を放つ。
これからどんな生活を送るだろうか。予想できないのが普通だが、あたしの場合、闇に包まれていた。
まるでビアンカの死のように。
彼女の死を追うと謎が絡んでくる。
一体彼女は、どんな目にあったんだ？
自分に似た、もう一人の自分。
窓を開ければ、冷たい風が顔を撫でた。

翌日もエドウィンに送られて登校。

「おい、くれぐれも男には気をつけ」

「はぁーい」

エドウィンの煩い注意を聞き流して車から降りれば「ビアンカ！」と呼ばれる。見れば椿が黒髪を靡かせて駆け寄ってきた。

「おはよう、椿」

「おはよう！」

「おはよう、初めまして。オレはエドウィンだ」

挨拶にエドウィンが乱入して車の窓から椿に手を差し出した。日本語で話し掛けられて驚いた様子だったが握手をする。

「エドウィンは、運転手」

「嘘こくな！オレはビアンカの家庭教師みたいなもんだ。ビアンカに悪い男がつかないように見ててくれないか？」

無駄なお節介。あたしは睨み付けたが椿は気付かず笑顔で頷いた。

「はいっ任せてください」

「ほら椿行きましょ」

これ以上吹き込まれない内に椿の手を引いて車から離れた。

「面白い人だね」

「ガミガミ煩い人よ」

笑って言いながら校舎へと入る。暫くしてラルク先生を見付けたから挨拶をした。

「おはようございます、ラルク先生」

「おはよう、ビアンカ」

手を振り返してラルクは行き来する生徒達の中へと消える。椿が静かだから見てみれば、怪訝そうな顔を伏せてラルクが消えた方を見ていた。

「椿？」

「あっ何？」

ハッとして顔をあげる椿は笑みをつくる。首を傾げた。

「どうしてラルク先生に挨拶しないの？」

「え…と、苦手であうゆう人」

「何かされたの？訴えてあげる」

あたしが言えば椿は吹き出した。授業が始まるため椿と別れて一時間目の授業に出た。それから二時間目の授業。

教室に入った瞬間、待ち構えていた生徒に塞がれた。

「やぁ、ビアンカ。オレはジェイド」

にやり笑みを浮かべて見つめてくるのはジェイドだった。あたしをニヤニヤと見ていた彼。

「知ってる」

「ほんと？嬉しいな。よかったら今夜デートしない？」

ずいっと顔を近付けてジェイドは誘ってきた。バカか、と思ったが彼に近付けばレイドシェルの秘密がわかるかもしれない。

「邪魔だぞ、ジェイド」

パンッとジェイドの頭に何かが振り落とされた。振り返ればラルクがいた。もう授業が始まるようだ。

教科書で叩かれたジェイドは膨れっ面をして席についた。　ラルクに背中を押され教室に入った。あたしを見付けたピエールが手を振ってきたが気付かぬフリして席につく。

授業が始まり、あたしは周りを見回した。あの妙な違和感を感じる。それは視線を送ってくるジェイドからか？

こうなればジェイドに関わって聞き出すか。あわよくばレイドシェルの口から聞けるかもしれない。

授業が終わり立ち上がればジェイドが振り返ってきて名前を呼んだ。

「考えておくわ」

微笑んでそれだけ言えばジェイドはぱっと笑顔を輝かせる。周りに自慢気にピースするのを横目で見ながら、ラルクとピエールの視線を感じた。

その教室を出て椿と合流。どんな授業だったかを話していれば次の授業が始まった。

レイドシェルは窓際の席で、あの本を開いて読んでいるようだ。後ろ姿も綺麗だ。

「ねぇ、椿。放課後遊びに行かない？」
「遊びに？」
「ええ、よかったら二人で。嫌いじゃないならショッピングしない？あたしあんまり外行かないからよく知らないけど」
「ビアンカとショッピングかぁ」
授業中に思い出し声を潜めて言えば、椿は乗り気に笑みを浮かべた。がすぐに浮かない顔をして伏せる。
「あ…でも、放課後って遅いよね？あたし…夜は…どうしても外せない用事が……」
しゅんと目を伏せていた椿は「ごめん」とあたしに謝罪しながら何処かを睨み付けていた。
目線を追って見れば、振り返っているレイドシェルにいきつく。
椿を見ていたレイドシェルはあたしに目を向けてから黒板に戻した。
「彼と知り合い？」
「え？」
きょとんと椿は目を丸める。
「彼よ」
あたしは指差した。ああ、とレイドシェルの背中を見たが首を振る。
「話したことない」
そう言って笑う。
椿も謎に関わっているのか？否、知っている？

「そう。残念だな、あたしボディーガードと外出しなきゃいけないから放課後しかないんだよね…」
「え……」

ちょっと大袈裟に呟く。一人で出掛けたいなら簡単に抜け出せる。
話は終わりにして数学の問題を解いていく。
授業が終わりランチの約束をしてから、椿とわかれた。

「おい」

そのあとレイドシェルに呼び止められた。

「昨日はありがとう、レイドシェル君」
「……」

礼を言ったら、口を尖らせて黙り込んだ。青い瞳であたしを観察するように見てから周りを確認して、腕を掴み人気のない教室に引っ張った。

「なに？」
「あの転入生と何話した？」

驚いていれば彼はそんなことを訊いてきた。聴こえたのか？日本語で話していたからわからなかったのか。

「買い物…と聴こえたが」
「盗み聞きなんて。いい耳してるのね」

答えろ、とレイドシェルは睨み付けた。

「放課後買い物に行こうって話してたの。でも彼女、夜は用事があるって」
「夜？夜はやめろ、危険だ」
“奴ら”が彷徨いているから？」

夜と言う単語に反応して彼はまた忠告した。そしてアレの話をしたら身勝手にも黙り込んだ。そしてあたしを置いて教室を出ようとした。そうはいかないとあたしは彼の腕を掴んだ。

「答えたんだから、貴方も答えて」
「…」
「彼女と知り合い？」

ギ、と眉間に深いシワを寄せてレイドシェルはあたしを睨み付ける。それは次第に苦しそうにも見えてきた。

「彼女達に伝えろ。“出ていけ”と」

頼むから放せ、と苦しそうに言うから放せば彼は吐き捨てるように言って教室を出ていった。
“出ていけ”だと？彼女達とはきっと杏子も含まれているのか。あの二人も関わっている。

“奴ら”はなんだ？
笑い声は人のようだったが一瞬で頭上を横切るのは人間には出来ない。

得体の知れない“奴ら”を知るべきだ。もしかしたら“奴ら”がビアンカを。

夜なら会える。銃を持って家を抜け出して行ってみよう。
そう考えながらベンチで椿を待っていたが、予定は変わってしまった。
「ビアンカ！放課後ショッピング行こう！」
眩しいくらいの笑顔で駆け寄った椿がそう言った。まるで仔犬みたいだ。
「杏子ちゃんに話したら陽が暮れるまでなら大丈夫だって！」
「ふぅん…そっか、じゃあ行こうか？」
「うんっ！」

椿は無邪気な笑顔で頷く。彼女はまだまだ子供だな、と思った。
思わず頭を撫でたくなる。
日溜まりでニコニコする彼女が“奴ら”と関係してるなんて到底思えなかった。
ちょこっと焼けた肌。下ろした黒い髪は太陽の光でしなやかに揺れてる。丸い円らな瞳に見つめられたら男は惚れてしまうだろう。
だから思わず聞いてしまった。
「彼氏、居る？」
「えっ」
不意打ちを食らったように丸く大きな目を見開く椿。
「貴女なら居そうだと思って」
「あ…あはは」

困ったように椿は苦笑した。言いづらいのか話したくないのか、否定も肯定もせずに首に垂らしたネックレスを握り締めて笑う。

「ビアンカはいるの？」

「いないわ。恋もずっとしてないかな…愛ってよくわからないから」

冗談で笑って言えば椿は食い付いた。

「愛って素敵なものだよ！愛は偉大！恋した方が女の子は輝くよっ！」

身を乗り出してまるで恋をしろっと説得する勢いで言ってきた。

それでいつも服の下に隠れて見えなかったネックレスが見えた。指輪だ。

椿の右手の薬指にしてある指輪と同じ形。違うのははめてある石の色。ネックレスは青色、指についている指輪は赤色。

「苦しい時でも愛があれば、平気だって思えるんだよ」

愛を語る椿はいつも以上にキラキラ輝いていた。恋する乙女。

彼女には誰か愛する人が、いたのかもしれない。過去形かどうかを訊くにはまだ会って間もない。あまりずかずか入ってはならないだろう。

「相手がいたら、素敵な恋をするわ」

「うんっ、ビアンカにお似合いの人がきっと現れるよ」

愛について語る彼女を見てるだけでお腹一杯だ。ショッピング中にも聞いてみよう。

「貴女のこともっと知りたい」
「ほんと？あたしもビアンカのこと知りたい」
「色々話しましょ」

お互い微笑みあって頷いた。
午後の授業を終えて二人でエドウィンを待つ。

「よう、ビアンカに悪い虫はたからなかったか？」
「はい、いませんでしたよ。日本語お上手ですね」
「エド、椿とショッピングしたいから何処かお勧めの店の前で下ろして」

着いて早々エドウィンに話した。

「ついてくる、なんて言ったら脱走するから。お父さんの許可はあるわ」

同行するなんて言われる前に言えば椿は笑いを堪える為、口を手で覆った。エドウィンは苦い顔をしたが従うことにしたらしく乗るように言う。
あたしと椿は後部座席に乗り込んだ。車を走らせてエドウィンは英語できいた。

「何の買い物をしたいんだ？」
「特に買うつもりはないけど、服がいい。それから書店も行きたいから」
「書店？学校の宿題かなんかで本でも？」
「あ、違います。あたしが読みたい本を探したいだけで」

不器用ながらも椿も英語で答えた。ふーん、と呟くエドウィンのあとにあたしは聞いてみる。

「椿は他に何語が話せるの？」

転々としていたのなら他の言葉も話せるかと思って聞けば恥ずかしそうに赤くなった。

「え、そんなに話せないよ。イタリア語を少し…あとロシアとイギリス…スペインとルーマニア…挨拶程度の言葉ぐらい」

「たくさんね」

「へぇー」

興味を持ったエドウィンがイタリア語で話し掛ければ椿もイタリア語で返した。

「上手いじゃんか」

「いえ、そんな…イタリアに滞在したのが長かったものですから…」

褒められるとまた赤くなって顔を伏せた。

「イタリアやルーマニア…そんなとこで何やってたんだ？」

その質問には困ったように目を游がす。保護者の仕事と言えばどんな仕事なのかを訊いてくるに違いないから言葉を探している。

「そんなことよりさ、お勧めの店はあるの？」

あたしは助け船を出した。

「あるに決まってんだろ」

エドウィンが答えた数分後、車は止まった。懐から出したメモに何かを書き込んでる。

「椿、降りてていいぞ」

「あ、はい」

椿が車を降りれば、エドウィンはメモと小さな銃をあたしに渡してきた。

「そこの店が気に食わなかったら印つけた店に行け、書店はここだ。これは護身用。向けても相手が逃げなかったら撃っていい」

オレが始末するから、と無理矢理小さな銃を持たせる。嫌なことを言うな。

「終わったら電話しろ、迎えにくる」

緩い返事をしてから降りた。車は直ぐにエンジンを唸らせて消えていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0734l/

水面の月の光

2010年10月14日15時01分発行